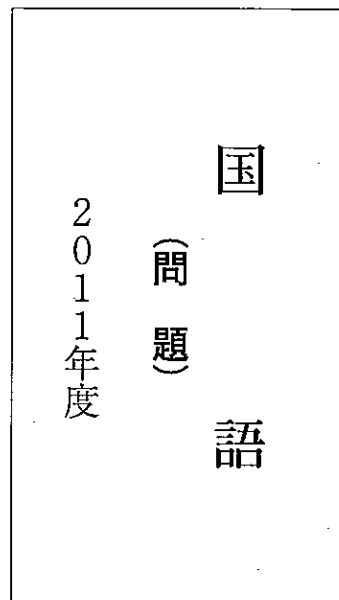




〈H23051121〉

### 注意事項

- 1 問題冊子は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべてマーク解答用紙の記入欄にHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルでマークすること。
- 4 試験開始後、氏名をマーク解答用紙の所定欄（一ヶ所）に記入すること。
- 5 マーク欄ははつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないように消すこと（砂消しゴムは使用しないこと）。

|         |      |      |      |
|---------|------|------|------|
| マークする時  | ● 良い | ○ 悪い | ○ 悪い |
| マークを消す時 | ○ 良い | ○ 悪い | ○ 悪い |

- 6 試験終了の指示がでたら、すぐに解答を止め、筆記具を置くこと。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

万物の変化するというのは、おのずからの理法であり、変化流行に移り進まなければ俳風もまた新しくなることがないという。芭蕉はたえず新しみを求めた。

したがって、芭蕉の全貌を語ろうとすれば、その展開の全過程をあとづけなければならないことになる。だが、わたしは若干の不備を覚悟のうえで、問題をいくつかの点にしぼってみたいと思う。わたしにも、芭蕉の全展開過程をあとづけてみたいという気持ちがないわけではないが、それがただリン郭をなでまわすような結果にならないためにも、ひとまず問題をしぼって見る必要があると思う。

A 芭蕉の生活面をとりあげることからはじめようと思う。それにしても、一人の詩人について、その作品からではなく生活あるいは伝記的側面から語りは始めることは、いささか邪道<sup>2</sup>めいてみえるであろうか。作家の実生活からただちにその文学を予測することはできないし、実生活に<sup>3</sup>元しえないものがあればこそ、文学という独自の世界が存在するのだともいえる。考えてみれば、作品をかくという生活そのものが、すでに日常的・経験的な生活の概念からはみだした部分をもっている。むしろ、生活と文学がまったく無関係に併存しているなどということはありえないし、その関係のありかたは、個々の作家、個々の表現形式のちがいにそくして具体的に検討されるほかないが、いずれにせよ、生活から文学を、文学から生活を、ただちに予測することはできないというその点では、例外はないといってよからう。

容易ではない。

B 詩と現実生活との対応関係を測定することは例えば、「創造された詩的模像<sup>モイラージュ</sup>はそれに対応する現実の事実、人物、経験の模像である必要はない。それは通常、純然たる仮象、純然たる虚構であつてもよく、本質的に虚の仮象であり、そしてそのような虚の客体が芸術作品なのである。つまりそれは完全な創作物である。」(S・K・ランガー『芸術とは何か』池上安太・矢野万里訳)

もつとも、「詩とはなにか」を、こんな具合に抽象化しようとした瞬間、それは、詩の概念にとつては不純物とみなされるような要素をもふくみこむことで具体化された現実の詩——そこにある具体的な詩作品——から、あるていど遠くのように思われる。人間は、「完全なる創作物」を創造することができるという、あるいはまた、そうした自己完結的な「創作物」がこの世に存在してもよいはずだというひそかな願望と期待が、そこにある具体的な作品の、多義的な存在感に対抗しながら、思想として自立しようとする。概念化にともなう一種の虚偽だともいえよう。しかし、そうした願望と期待が、他のジャンルよりも、詩を通して、より多く証明されつづけてきたという事実、C 詩がその願望や期待にふさわしい世界であるという事実もまた、認めないわけにはいかないだろう。だが、それにもかかわらず、わたしは、芭蕉を、作品からではなく、現実の生活形態のほうからみていこうと思う。なぜか。芭蕉の生活が、すでに、通念としての「生活」からはみだすものであり、いわば虚構された生活とでもいうほかないようなものだからである。なんらかの意味で虚構のない生活そのものといった「生活」などありえないということを前提にしたうえで、なお、このことはいえるだろう。

芭蕉といえは、すぐ、旅と草庵の生涯をおもいうかべるほどに、芭蕉は旅の詩人、草庵の詩人として馴染<sup>なじ</sup>まれて来た。だが、ここにある種の類廃がないわけではない。われわれは、芭蕉とそうのように馴染むことによって、芭蕉を、われわれの外——まさに旅と草庵という特殊な世界——に祭りあげ、そうすることで、芭蕉の危機感とたくみに絶縁する。敬して、しかも脅かされることのない関係を、そこに結ぶ。「芭蕉のきびしさ」といったふうの、感嘆まじりの讚美も、しよせん、同類である。感嘆まじりの美文を綴<sup>つづ</sup>っている限り、自分にはねかえってくるということはまずない。はねかえりをうけとめることと、心情的な吐露とは別のものである。むしろ、芭蕉のまねをする必要はさらさらないが、しかし、祭りあげることによって、芭蕉から真の意味で自由になれるとも思われない。危機感との絶縁は自由を意味しない。なるほど、芭蕉は旅の詩人として馴染まれることで普遍化されたといえなくもないが、それは同時に風化の現象でもあった。われわれはいま、この馴染みの関係を破り、芭蕉の生きかたは奇怪だという率直な懷疑から出発しなおす必要があるのではなからうか。そのとき、はじめて、旅と草庵の生涯という独自の生きかたのもつ意味が、特殊性のなかに祭りあげられることなく、普遍的な場で問われることになるだろうし、その問いを通して、われわれは、敬して祭りあげるといった関係ではない新たな関係を、芭蕉とのあいだに結ぶことができるだろう。

(廣末保『芭蕉』より)

問一 傍線部1～3にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- |   |   |     |   |     |   |     |   |     |   |     |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | ア | 人リン | イ | 年リン | ウ | 君リン | エ | リン立 | オ | リン接 |
| 2 | ア | 空ドウ | イ | ドウ体 | ウ | ドウ向 | エ | ドウ徳 | オ | 殿ドウ |
| 3 | ア | カン闘 | イ | 返カン | ウ | カン衝 | エ | カン声 | オ | 循カン |

問二 空欄 A C に入るもつとも適当な語をそれぞれ次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- |   |   |        |   |       |   |        |   |         |   |      |
|---|---|--------|---|-------|---|--------|---|---------|---|------|
| A | ア | さしあたって | イ | ただし   | ウ | むしろ    | エ | わざと     | オ | しかし  |
| B | ア | いまだに   | イ | とりあえず | ウ | それにしても | エ | あくまで    | オ | わけても |
| C | ア | あるいは   | イ | あたかも  | ウ | ともかく   | エ | いずれにしても | オ | つまり  |

問三 傍線部 a「概念化にともなう一種の虚偽」の説明としてもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 芸術作品を抽象化しようとすると、かならずある種の具体性が不純物として含まれるということ  
イ ランガーが詩を現実から切り離し過度に抽象化したために、詩本来の現実感覚がなくなってしまったこと  
ウ 詩は現実に関かれた多義的なものでありながら、同時に純然たる仮象であるという二面性が否定されるということ

- エ 詩を自己完結的な創作物として抽象化することで、具体的な詩作品の存在感を無視してしまうということ  
オ 芸術作品を完全なる創作物と考える限り、ランガーの言う「虚の客体」という考えが成立するということ

問四 傍線部 b「はねかえりをうけとめることと、心情的な吐露とは別のものである。」の説明としてもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 芭蕉の厳しさを感じとることと、その厳しさに反発することとは区別されなければならない。  
イ 芭蕉の危機感を理解することと、それを常套句で賛美することとは区別されなければならない。  
ウ 芭蕉を通して自己批判の精神を持つことと、芭蕉を模倣することとは区別されなければならない。  
エ 芭蕉に慣れ親しんだ自分を内省することと、その自分に酔いしれることとは区別されなければならない。  
オ 芭蕉の厳しさに脅かされることと、敬して遠ざけることとは区別されなければならない。

問五 この文章の内容に合致しないものを次のア～オから二つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 一人の作家を評価するにあたり、伝記的側面を切り離して、純粹に文学作品のみを取り上げるという方法には偏りがあると筆者は考えている。  
イ ランガーはその芸術論において、芸術作品は、実際の経験とは切り離すことのできる抽象的なものであると位置づけた。

ウ 筆者は芸術作品の中に存在する不純物こそが、芸術を芸術たらしめるものであると考えている。

エ 筆者は、芭蕉の実生活は奇妙で特殊なものであり、その特殊性を認識することが、その文学を理解する手がかりだと考えている。

オ 芭蕉を旅と草庵の詩人であるという概念で普遍化することによって、芭蕉文学の本質から遠ざかるという現象が生じた。

カ 人間は、とすると、「完全な創作物」を創造したいと願ひ、そのために芸術論を援用しようとする。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

天動説は天の詳しい観察から崩れることになった。それも、フラウエンブルグ寺院の大管区長という、神に最も近いはずのコペルニクス(一四七三―一五四三)によって。

コペルニクスは、神が宇宙を創ったのなら、こんなに複雑な宇宙であるはずがないと疑ったのだ。実際、天動説によつて七つの星<sup>星</sup>の運動を説明するためには、全体で八〇を超える円運動を組み合わせねばならなかった。天動説宇宙は、惑星運動の観測が進むにつれ、ますます複雑な体系になっていったのだ。

科学者気質の特徴の一つは疑い深いことにあるが、それは必ずしも猜疑心のことではない。自らの単純性と現実の複雑性がぶつかったとき、その矛盾が喉に引っかかって現実が飲み込めないだけなのである。既存の理論体系を疑うことなくどっぷり浸かってしまうと、複雑怪奇になってしまった理論の醜さに気がつかないが、ふと我に返って客観的に見たとき、その醜悪さに疑いを持つてしまうのだ。「神はもつと単純で美しい宇宙を創ったはず」だ、と、スコラ哲学<sup>スコラ哲学</sup>における思想節約の原理「オッカムの剃刀<sup>かみそり</sup>」のように、

A

こそ美しい、とする科学者の審美観もあるだろう。それを「神」と呼ぶかどうかは別として。

天動説から地動説に移ることは、とりもなおさず、地球が宇宙の中心にあつて不動であるという特権的な地位を振り捨てることに他ならない。地球も、太陽の周りをまわる一つの惑星に過ぎなくなるからだ。ならば、唯一神が地球に在るという根拠もなくなってしまう。

では、神はどこにいるのか？ 地動説を採るためには、新たな神の居場所を考え出さねばならない。コペルニクスの時代、人々の宇宙は太陽系に閉じていた。したがって、神を宇宙の中心に据えようとすれば、太陽に神の座を用意しなければならぬが、燃え盛る灼熱<sup>しやうねつ</sup>の太陽ではさすがの神も居心地が悪かるう。とりあえず、コペルニクスは、神の居場所と宇宙体系を切り離すことにした。地動説は天上の幾何学であつて、地上における神の存在証明とは無関係であるという態度を貫き通したのだ。

折しも、宗教改革の火の手が上がつていた時代で、聖書のみが真の権威であるとするルター派は、コペルニクス宇宙に激しい攻撃を加えた。太陽も月と同じように地球の周りをまわっていると書かれていないか、というわけだ。

フランスのカルヴァン(一五〇九―一六四一)も、聖書に書かれているように神はこの地球におわすことを強調した。神の居場所を地球に据えたままでは地球は動かないのである。その意味で、宗教改革の主唱者たちは、自然科学については頑固な守旧派であつたのだ。

興味深いことに、十六世紀までのローマ教会は新規の説に寛容であつた。であればこそ、カトリック教会に属するコペルニクスが『天体の回転について』(一五四三)と題する著作によつて、地動説を発表することができたのだ(もつとも、彼は自説の発表をためらい、この本が刷り上がったのは彼の死の年であつたのだが)。そのような宗教的対立が背後にあつたためだろう、コペルニクスの著作の序文において、ルター派のアンドレアス・オジアンダー(一四九八―一五五二)は「これらの仮説(地動説のこと)が真である必要もなければ、確からしいものである必要さえない。ただ、それらによつて観測と矛盾のない計算が可能になればそれで充分なのである」と書いている。コペルニクス説は一つの仮説に過ぎないことを強調して、

B

のだ。

神の新たな居場所を見出したのはガリレイ(一五六四―一六四二)であつた。一六〇九年、ガリレイは発明されたばかりの望遠鏡を手にして天の川に目を向けた。そして、ミルクを流したようにみえる天の川は、実は無数の「太陽」の集まりであることを発見したのだ。このとき、人々の宇宙は、太陽系から無数の星が散らばる星界へと一挙に拡大することになった。ならば、太陽系の中心にいたがるようなケチな神ではなく、より広い星の世界全体を統括する神こそが、完全なる存在としてふさわしい。神は、この地球から離れて、無限の彼方にまで広がる宇宙を経<sup>へ</sup>巡<sup>めぐ</sup>つているとすればよいではないか(むろん、神を独占しなかったら、あなたの心に秘かに匿<sup>かくま</sup>つてもいい)。

ガリレイが地動説を公然と支持するようになったころ、それまで寛容であつたローマ教会からも「地球が動くという説は聖書の記述と矛盾する」という非難がわき起こつた。それが一六一六年の第一次ガリレイ裁判につながるのだが、ガリレイは、その前年の一六一五年にクリスティーナ大公妃宛の手紙で、彼の聖書観を述べている。そこでは、「聖書」には大変難解な箇所があり、文字通りの意味とはまったく異なつたことが述べられていたりします。もし、「聖書」の記述を字義通りに受け取ってしまうと、誤りを犯すことがあるかもしれません。というのも、聖霊が述べた「聖書」の言葉は、無学で教養のない庶民にも理解できるようにと、聖なる筆記者が書き留めたもの」なのだから、と書いている。彼の立場は、神は「最初に自然を通して、次には特にその教えによつて理解される。つまり、神の作品である自然と、

神の言葉である教えによつて」理解される存在であつた。「自然についていえば、これは容赦なく

C

であり、

「この点は、文字通りの意味とはいくらも異なる解釈がありうる『聖書』とは違つている」として、自然研究こそ神の証明にとつて重要であると説いたのだ。ガリレイは教会に屈服して地動説を捨てたが、結果的には、このような考えか

たが神を地上から追放する端緒となったのである。

ガリレイは、最初の自然科学者であるとともに、権力に弾圧された最初の科学者ともなった。

(池内了「物理学と神」より)

注1 七つの星……太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星を指す。

注2 スコラ哲学……中世ヨーロッパで教会・修道院付属の学校や大学を中心として形成された神学・哲学の総称。

問六 本文から判断して、空欄 **A** に入るもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 最小コストで最大利益がもたらされる理論
- イ 高次構造を低次元の要素に分解する理論
- ウ 既存理論に最低限の修正がほどこされた理論
- エ 複数の思想にも応用できる普遍理論
- オ 最小の仮定で最大の結果が得られる理論

問七 傍線部1「神の居場所を地球に据えたままでは地球は動かない」の意味としてもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 神の宇宙創造の拠点は地球である
- イ 絶対権力によって宇宙の安定は守られている
- ウ 宗教は宇宙の科学の下位にある
- エ 万能神が統括する宇宙の範囲は無限である
- オ 最も権威を持つものが宇宙の中心にある

問八 空欄 **B** に入るもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 改革派の寛容を示そうとした
- イ 攻撃から身をかわそうとした
- ウ 科学を相対化しようとした
- エ 教会の権威の前に屈した
- オ 二つの宗派の共存を試みた

問九 傍線部2「ケチな」の意味としてもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 欲の深い
- イ 貧乏な
- ウ 厚かましい
- エ 野心のない
- オ 不景気な

問十 空欄 **C** に入るもつとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 不変なもの
- イ 変化するもの
- ウ 過酷なもの
- エ 自律的なもの
- オ 反応しないもの

問十一 コペルニクスとガリレイの自然研究について、本文の内容と合致しないものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア ガリレイは、肉眼での観察だけではなく望遠鏡という技術を使って自然を研究した。
- イ コペルニクスは、宇宙についての説明は幾何学と無関係という態度をとった。
- ウ ガリレイは、自然の客観的説明は聖書の記述に縛られないと説いた。
- エ ガリレイは、自然界の研究と神への信仰は共存すると考えた。
- オ コペルニクスは、自らの研究成果と教会の権威との明確な対峙を避けた。

問十二 神の存在と宇宙観について、本文の内容と合致するものを次のア～オから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア コペルニクスの時代の宇宙とは太陽系を意味し、創造神は太陽に居ると信じられていた。
- イ ローマ教会は、神の居る天が動くとする天動説以外の宇宙観は神の教えに反すると断定した。
- ウ 惑星運動の観測によって神の権威は拡大され、天動説への支持が強まった。
- エ 太陽系外に広がる宇宙を発見することによって、初めて地動説が提唱された。
- オ 自然観察のデータをふまえると、聖書の記述と一致する天動説より地動説の方が単純である。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、歌よみの元輔、内蔵助くらのすけになりて、賀茂祭つかひの使しけるに、一条大路渡りける程に、殿上人の車多く並立てて、物見ける前渡る程に、おいらかにては渡らで、人見給ふにと思ひて、馬をいたくあふりければ、馬狂ひて落ちぬ。年老いたる者の、頭をさかさまにて落ちぬ。君達あないみじと見る程に、いとく起きぬれば、冠脱Bげにけり。髻もと露なし。ただほときを被かきたるやうにてなんありける。

馬添うまぞへを、手惑てまどひをして、「冠を取りて着せさすれど、後さまにかきて、「あな騒がし。暫し待て。君達に聞ゆべき事あり」とて、殿上人どもの車の前に歩み寄る。日のさしたるに、頭きらきらとして、いみじう見苦し。大路の者、市をなして笑ひのあはれのしる事限なし。車、棧敷かきの者ども笑ひのあはれのしるに、一つの車の方さまに歩み寄りていふやう、「君達、この馬より落ちて冠落したるをば、をこなりと思ひ給ふ。しか思ひ給ふまじ。その故は、心ばせある人だにも、物につまづき倒るる事は常の事なり。まして馬は心あるものにあらず。この大路はいみじう石高し。馬は口を張りたれば、歩まんと思ふだに歩まれず。と引き、かう引き、くるめかせば、倒れんとす。馬を悪しと思ふべきにあらず。唐鞍からくらはさらなる、鐙あぶみの、かくうべくもあらず。それに馬はいたくつまづけば落ちぬ。それ悪しからず。また冠の落つる事は、物して結ふものにあらず。髪をよくかき入れたるに、とらへらるるものなり。それに髪は失せにたれば、ひたぶるになし。されば落ちん事、冠恨むべきやうなし。また例なきにあらず。何の大臣は、大嘗会の御禊みそぎに落つ。何の中納言は、その時の行幸に落つ。かくのごとく、例も考へやるべからず。然れば、案内Cも知り給はぬこの比ひの若き君達、笑ひ給ふべきにあらず。笑ひ給はばをこなるべし」とて、車ごとに手を折りつつ数へて、言ひ聞かす。かくのごとく言ひ果てて、「冠持て来」といひてなん、取りてさし入れける。その時に、とよみて笑ひのしる事限なし。冠せさすとて、馬添の曰く、「落ち給ふ則ち冠を奉らで、などかくよしなし事は仰せらるるぞ」と問ひければ、「痴事しれごとな言ひぞ。かく道理をいひ聞かせたらばこそ、この君達は、後々にも笑は、長く笑ひなんものをや」とぞいひける。人笑はする事、役にするなりけり。

〔宇治拾遺物語集〕より

注1 髻……髪をてつぺんで束ねた部分

注2 ほとき……腹の部分が大きく口のすばまつた形をした瓦器

注3 馬添……馬の口取り・馬丁

注4 唐鞍……唐国の作り方を真似て作った馬具

注5 かくうべくもあらず……足を踏みかけることもできない

注6 大嘗会の御禊……天皇即位後、初めて行う新嘗祭の年の十月に、賀茂の川原で行われるみそぎの儀式

問十三 傍線部 A「おいらかにては渡らで」の現代語訳としてもっとも適当なものを次のア～オから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 苦しそうな様子は見せずに通って  
イ おとなしくは通らないで  
ウ 自分勝手な様子で通って  
エ おう揚な様子で通って  
オ あわてて通ることなく

問十四 波線部 a「のしる」、b「をこなり」、c「案内」、d「よしなし事」の語義の組み合わせとして正しいものを次のア～カから選び、その解答欄にマークせよ。

- |     |         |   |      |   |           |   |          |
|-----|---------|---|------|---|-----------|---|----------|
| ア a | 悪口雑言を言う | b | 下品だ  | c | てがかりになるもの | d | つまらない話   |
| イ a | 悪口を言う   | b | おろかだ | c | 背景        | d | 聞こえのいいこと |
| ウ a | 大騒ぎする   | b | おろかだ | c | 事情        | d | つまらないこと  |
| エ a | 罵る      | b | 純粹だ  | c | 背景        | d | 理屈っぽいこと  |
| オ a | 騒ぎ立てる   | b | 下品だ  | c | 道案内       | d | 聞こえのいいこと |
| カ a | 騒ぎまわる   | b | 純粹だ  | c | 事情        | d | 理屈っぽいこと  |

問十五 傍線部Bの「脱げにけり」の「に」と同じ働きをもった「に」を含むものを傍線部Aから一つ選び、その解答欄にマークせよ。

- ア さかさまにて落ちぬ
- イ 笑ひののしるに
- ウ 一つの車の方ざまに
- エ 心あるものにあらず
- オ 失せにたれば

問十六 傍線部C「君達に聞ゆべき事あり」の現代語訳としてもっとも適当なものを次のAから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア あなた方に申しあげるべきことがある
- イ 高貴な方にしか聞こえないことがある
- ウ 高貴な方が声をあげるべきことがある
- エ あなた方に聞こえて当然なことがある
- オ あなた方の耳には入らないことがある

問十七 傍線部D「しか思ひ給ふまじ」について、話者が考えている理由としてもっとも適当なものを次のAから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 落馬して冠を落としたことは、足どりの不確かな馬のせいであって、自分のせいではないから。
- イ 冠が落ちたのは自分の頭に髪がけないせいだが、それは自然なことであって、先例もあることから。
- ウ 目下のものが目上の人間を勝手に評価することは、どんな評価であれ、許されることではないから。
- エ 馬がつまずいて倒れることも、冠が落ちることも理由のあることであり、また、先例のないことでもないから。
- オ この大通りで落馬したのは自分が初めてではない。自分のせいでも、馬のせいでもなく、通りの不便さがなよりの問題だから。

問十八 空欄 A に入る言葉としてもっとも適当なものを次のAから選び、その解答欄にマークせよ。

- ア ざりつれ
- イ ざらむ
- ウ ざりつる
- エ ざなり
- オ ざらめ

問十九 傍線部E「人笑はする事、役にするなりけり」とは誰のどのような様子を指したのか。次のAからもっとも適当なものを選び、その解答欄にマークせよ。

- ア 落馬した老人に対して冷たい笑いをあびせる、都の若い貴族たちの冷酷な様子
- イ 衆人が嘲笑する中、あくまで元輔を擁護しようとする、馬の口取りの仕事に徹した様子
- ウ へつらった振る舞いのかげで元輔を冷笑する、馬の口取りの底意地の悪い様子
- エ 落馬のような日常のありふれた出来事に笑いを見出す、都人たちの洗練された様子
- オ みつともない姿をさらしながら言い訳し、滑稽に見えてしまう元輔の様子